

# 野川河床整備工事における地元との合意形成について

## 1. 野川の河道整備と自然環境

野川では、台風や集中豪雨による水害から都民の命と暮らしを守るため、時間50ミリの降雨に対応する河道断面の整備を下流から順次進めている。現在は、小田急線交差箇所から狛江市との境までの区間の整備を進めており、今年度工事をもって二建管内の整備は、概ね完了する予定である。(図-1)

この区間は、野川(世田谷区内)でも特に豊かな自然環境を有する区間であり、国分寺崖線からの湧水が多数流入し、その水路にはゲンジボタルが自生するなど希少な動植物が生息している。また、河道内に自生した巨大な樹木が点在し、その木陰は多くの魚や鳥類の休息場所となっている。中でも、長年地域から愛され、シンボルツリーとなっているオオシマザクラが河床整備工事でどのように扱われるのか、地域から非常に高い感心が寄せられていた。(写真-1)

今回は、オオシマザクラ周辺の河床整備を進めるために、地域住民や市民団体との意見交換を十分に重ねたプロセスや二建の取組みについて紹介する。

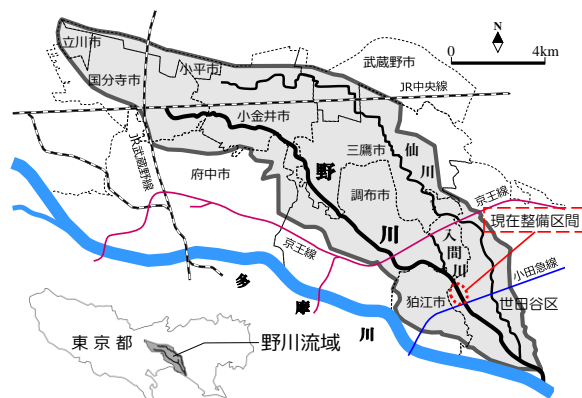


図-1 野川流域と現在整備区間



写真-1 河道内のオオシマザクラ

## 2. 地域住民及び市民団体との意見交換

二建は、オオシマザクラが河積阻害となることや著しく損傷している老木であることを踏まえ、当初は伐採する方針であった。また、一部沿川住民からも治水安全上の観点から伐採を望む声があった。一方、市民団体や一部地元住民からは、オオシマザクラ自身とそれが生み出す環境を保全し、次世代へ残していきたいという要望が寄せられた。

野川では、このような意見の相違を埋め、事業を円滑に進めるために、平成26年度から二建・河川部、世田谷区、市民団体で意見交換会を32回、近隣住民説明会を4回実施してきた。そこでは、河床整備工事の施工方法や使用材料など、環境の保全や回復のために必要な方策について様々な意見を出し合い議論を重ねてきた。中でもオオシマザクラの取扱いやその周辺整備の検討については多くの時間をかけ、丁寧な説明を行ってきた。

## 3. 合意形成を図るための検討

二建と一部沿川住民は、治水を考慮してオオシマザクラを伐採したい、一方で、市民団体と一部地元住民は環境を保全して次世代に継承したい、この相対する考えを両立するために以下の検討を行った。

まず、オオシマザクラが生み出す魚や鳥類の休息場所となり得る環境を新たに創造することを検討した。具体的には、河道内に新設構造物で壁を作り、その背後の死水域（下流側の流れがよどむエリア）に代替樹を植えて環境を再現することを提案した（図-2）。この案は、意見交換会でも写真やパース図を多く用い、実施に向けて1年以上時間をかけて丁寧に説明した。しかし、この案は、次世代へ環境を残せるというメリットがある一方、現在の景観を大きく改変するデメリットがあった。どちらを選択すべきか、市民団体の中でも、なかなか意見が纏まらず、意見交換会中に意見の相違から、退席する方が出る場面もあった。最終的には、新設構造物が現在の景観を変えることに賛同が得られず採用には至らなかった。

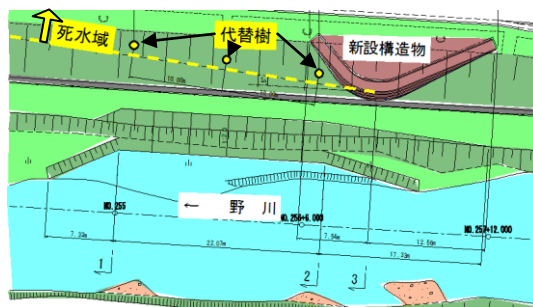


図-2 死水域に代替樹を植える案

これに並行して、既存オオシマザクラを伐採せず、流水の阻害となる計画高水位以下の枝葉を全て剪定することを検討した。この案は、現在の樹形と大きく変わり、水辺に伸びる枝葉の木陰が創る環境が維持できないことや、シンボルツリーとしての機能も失われるという理由から市民団体の理解が得られなかった。（図-3、4）

最後に、既存の樹形を維持しつつ、時間50ミリの洪水を安全に流下させることができる限界を求める検討を行った。現状のままでは枝葉が阻害となり、水位が計画高水位を上回ってしまうため、阻害する枝葉を少しずつ落としていき洪水を流すことができる限界を水理計算により求めた。これにより、当初に比べ、樹形を大きく変えることなく洪水に対する安全性も確保できた。（図-5）この案については、机上の説明だけでなく、現地での意見交換会を開催した。（写真-2）現地では、剪定が必要な枝に目印を付けて剪定後も樹形が保てることを説明した。併せて、樹木医の資格を持った専門家を招き、改めて現状のオオシマザクラが著しく損傷している老木であることを説明した。そのため、剪定して残した後も、定期的な健全度調査や剪定の実施、不健全と判断された場合等には伐採することも説明したうえで、整備方針について合意することができた。



写真-2 現地開催の意見交換会

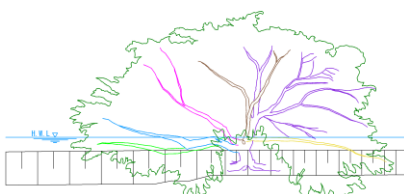


図-3 現況の樹形  
（左岸側からの眺望）

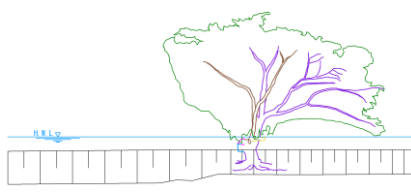


図-4 計画高水位以下の枝を全て  
剪定した場合の樹形

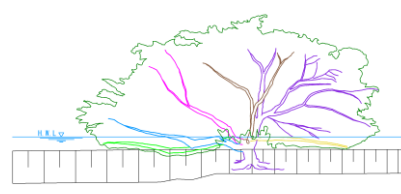


図-5 最低限の枝を  
剪定した場合の樹形

#### 4. まとめ

本発表では、河床整備工事における地元と合意形成を図ったプロセスや取組みを紹介した。上記の意見交換等に加え、工事前の掘削区間の植物移植や止水区間に残された魚類の救出など、環境への配慮や協力を地域の方々と歴代担当者が毎年行ってきた。このような積み重ねにより地元との良好な信頼関係が築け、今回の合意形成が図れた。